

## 相州小田原の医史片々

中西 淳 朗

相州小田原の医学史についてまとめた研究書は私の管見の範囲では知らない。

小田原というとまず「ういろう」という粒状の売薬が有名である。漢字で外郎とかき発売元は代々藤右衛門を名のり、現在は二十四代六百年の歴史がある。小田原藩の儒学、医療に大いに貢献したが、その細目については今後改めて研究する余地がある。

小田原藩における蘭学は、海防上の江川流、医術上の檜林、杉田流が江戸時代後半におこったが、藩の財政は宝永以降の度重なる天災のため非常に苦しく、且つ江戸城の西の出城という特別な役目による出費もあり、学問のための経費を十分に計上できなかった。

このような経済環境の中で、寛政十年十一月二十六日（西暦一七九九年一月一日）付の蘭学者相撲見立番附に、相州・市川隆甫が西の三段目の五枚目に見出すことができる。

小田原市茶畑町（バス箱根口下車、海岸側）の日蓮宗妙珍山蓮昌寺の墓地にこの市川隆甫一族の墓がある。左手が江戸期の古い墓三基が並び、右から隆甫、蟠竜窟蘭好、市川玄順と考えられる。右手には新墓があるが問題は蟠竜窟蘭好の墓誌で、選文は藩校学頭の宇野懷徳である。墓石に少々いたみ

があり読みづらいが、大凡は次の如くである。

『市川蘭好は安永四年（一七七五）六月三日の生れで、西海子（サイカチ）小路Ⅱ武家屋敷町で育った。杉田玄白の門に入って内外の学問や俗事を含めて学び、小田原に帰ってきて侍医となり栄進した。趣味として茶道をたしなんだが、文政十二年、つまり天保元年に五十五歳で他界した』

杉田玄白の『解体新書』の出版が安永三年であるから、その翌年に市川蘭好が生れたことになる。玄白の死去は文政十四年（一八一七）であるから、蘭好はその年四十二歳である。仮に蘭好が二十五歳で天眞楼に入門していたとすると、玄白は古稀目前の頃ということになる。

そこで天眞楼入門帖を、やっと川島恂二氏著『土井藩歴代蘭医河口家と河口信任』の三二二頁に見出した。そこには玄白死去年の天眞楼塾生名簿があり、この時は市川蘭好は小田原に帰っていて名は当然見出し得ない。

川島先生のご意見では、文化二年玄白が随筆集「玉味噌」をかいた時、相州に門人一人がいるとかいているが、実際は養子の伯元の弟子であろうし、弟子も玄白の弟子と名のつた方が外聞がよいので、多くは伯元の弟子とは云わなかったとご教示いただいた。

市川蘭好のことはこのぐらしか判明していない。しかし兄と思われる隆甫については寛政十年以降、小田原藩医学肝煎で奥医師となっており、文政八年（一八二五）に五十二歳で京都に遊学（休暇中につきこの年の家中分限帖には名が上

つておらず、父の玄順が隠居留守番ということ十五人扶持と書かれている)、文政十一年に帰国して七年後の天保九年(一八三八)に死亡している。

この市川隆甫は京都往復の途中、沼津で知合った地方医師の頭之と文通を重ねていたところ、弟の蘭好が死去したので、隆甫は頭之を藩医に推せんし、頭之は仕官して市河魯庵と名のつた。そして天保三年、五十二歳の時、長崎へ留学し植林栄建に蘭学を学び三年後帰国した。しかし天保八年(一八三七)に五十六歳で死亡した。困った隆甫は、魯庵の後妻の連れ子・湯山家次男貫太を養う形とし恭斉と名のらせた。ところが翌年隆甫が死亡したので、恭斉自から市河家を継ぎ、市川隆甫のあとに中村家より栄達(藩医中村見外の次男か)を迎え入れた。

市河恭斉も早死で弘化四年(一八四八)三十七歳で他界、十三歳の玄智(明治に入り顕道を名のる)が後を継いだ。この玄智の先祖書並に神奈川県史料第五卷四二八頁に、この玄智が市川隆甫に学び後に佐倉の佐藤泰然の門下となり、明治九年(一八七六)に小田原梅毒病院医員と記されている。即ち、市川隆甫は二人おり、多分、中村家から入った栄達が二代目を名のつていたと思われる。

相州小田原では、明治に入ると青年達は急速に英学の方に傾き、蘭学の芽は市川、市河家以外にもあったにも拘わらず、遂に根づかずに終ってしまった。

小田原の医療というと、外郎家があげられるが、ここは私事では宇野藤右衛門を名のり、一族中から藩校集成館の教授を多くだしており、市川蘭好の墓誌をかけた宇野懐徳もその中の一人と思われ、市河家とも縁戚があるらしいのである。小田原の宇野家も二家あつて、なかなか難かしいが今後の課題である。

以上、市川、市河両家を中心に報告した。

(二〇〇二年六月例会)

\*\*\* 紹 介 \*\*\*

杉浦 守邦 著

### 『カルテ拝見 武将の死因』

武将が政治の実権を握るようになると、武将の病氣や死が政治や治世に大きく影響するようになった。そのため、武将の病氣や死因には多くの脚色がなされた。特に江戸時代に書かれた史料は、それぞれの大名家の思惑などで、事実に対し美化したり、英雄譚にしているものが多い。黒田如水の例がその典型であろう。

貝原益軒撰の『黒田家譜』では、如水が福岡で病死し、福岡の崇福寺に葬られた。死期が迫った時、子の長政に遺言し、辞世の歌を詠んでいると書かれているが、これらの話は皆作